

黃熱ニ就テ Über die gelben fieber. (豫報第二)

於クサイ島 田丸 要 植

予輩曩ニ本誌第三百五十六號ニ於テ「黃熱ニ就テ」ト題シ當島(東經百六十三度北緯五度二十分)ニ於ケル特異ナル熱性黃疸ニ就テ豫報シタルガ其後十數例ノ患者ニ接シ一般のニ臨牀上ノ症狀ヲ認識シ得タルヲ以テ之ヲ報告スルト共ニ予ノ淺薄ナル感想ヲ述ベ敢テ先輩識者ノ高教ヲ仰ガントス。

第一例 高村某 日本人(男) 十八歲。

初診 大正八年九月十五日。

主訴 頭痛、心窩痛、食慾不振、倦怠。

既往症 幼時ヨリ著患ヲ知ラズ最近一箇月前インネム(南拓會社開墾地

ニシテ泥濘ノ地ニシテ屢々全身ヲ没入スルコトアリ目下盛ニ森林伐採開墾中ニシテ蚊群甚ダ多ク晝夜刺傷ニナヤマサル現ニ昨年中邦人二名熱性黃疸ヲ發シ死亡シタル歴史ヲ有スル不健康地?ナリ)ヨリ當レロ(本島中最モ健康地ト目セラレ民政署學校ヲ初メ邦人及土人ノ主ナル住居地ニシテ我病院所在地ナリ)ニ移轉シ專ラ建築部ニ附屬シテ勞働ニ從事中昨夜ヨリ頭重頭痛惡寒倦怠心窩不快等ヲ發ストイフ。

現症 體溫三八・三、脈搏九〇至。

眼球結膜ノ充血ヲ呈シ心窩部殊ニ肝臟部過敏ナル外著明ナル他覺的變化ナシ一般のニ疑ハシキヲ以テ直チニ入院ヲ命ス。

十六日 肝下緣ヲ觸レル。

十七日 眼球結膜ノ充血益々甚シ。

十八日 咳嗽喀痰アリ少量ノ血液ヲ混ス鏡檢スルモ異常ヲ認メズ。

二十日 眼球結膜及顔面及上胸部ニ輕度ノ黃色ヲ認ム此日午後ニ至リ全身搔痒感黃視等現ハル。

尙ホ肝臟部ハ甚ダ過敏ニシテヨク肝ヲ觸ル、モ心窩ハ稍々緩解セリ。

血液検査 異常ヲ認メズ(第一回)

二十一日 自覺症良好ナルモ耳鳴不眠ニコマルトイフ。

二十二日 血液検査 異常ヲ認メズ(第二回)

二十三日 皮膚及結膜ノ黃色稍々減退シ唯視矇ヲ自覺ス。

十月六日 全治退院。

第二例 シエーク 本島民(男) 三十八歲。

初診 大正八年九月十九日。

主訴 全身極度ノ疲勞衰弱感。

既往症 三年前迄數年間英領ナウルニ渡航シ昨年ハ觀光團員トシテ日本

ニ液航シタリ本病ハ十日バカリ前迄インネム(前記南拓開墾地)ニテ森林伐採開墾ニ從事シ多量ノ河水ヲ飲用シタリ然ルニ七日バカリ前ヨリ倦怠食慾不振頭痛ヲ發シ一兩日前ヨリハ全ク歩行不能トナレリトイフ。

現症 體溫三七・二、脈搏九〇至。

全身高等ニ黄色ヲ呈シ眼珠結膜殊ニ甚シ肝脾ヲ觸レス心窩部殊ニ肝臟部過敏ナラズ。

尿利 ヨク分ラマケレドモ少量ノ排尿存スル如シ。

糞便 下利等ナク却ツテ便秘スルモノ、如シ。

其他嘔氣嘔吐等ナク一般ニ變化少ナシ。

血液検査 異常ヲ認メズ(第一回)

二十日 體溫三六・八、脈搏一〇〇至。

黃視始マル嘔吐アリ少量ノ血液ヲ混ズ吐物ニ特異ナル變化ナシ。

檢尿 膽汁色素著明、蛋白僅微。

二十一日 體溫三六・五、脈一〇〇至不良。

全身ノ黄色益々著明ニシテ朝來譫語ヲ發シ腦症ヲ發セシモノ、如シ。

二十二日 體溫三七・二、脈搏九六至弱。

一般ニ腦症増激シ昏睡状態トナリ外來ノ刺戟ニ感ゼザルニ至ル。

血液検査 異常ヲ認メズ(第二回)

發病乃至初診以來事情上入院セシムル能ハズ經過觀察上甚ダ不便ナリ殊

ニ尿利ハ或ハ存ストイフモ極メテ少量ナル如シ便通ナシ「リスリン」浣腸

ニ筒ニヨリ硬便少量アリ。

午後ニ至リ症狀益々險惡ナルヲ以テ「カンフル」ニ筒食鹽水六〇〇・〇(左

田丸一黃熱ニ就テ

下腹壁皮下)ヲ注射セシモ遂ニ醒覺セズ此夜十一時頃心臓麻痺ヲ以テ死亡ス。

備考 本患者ハ初診時既ニ著明ナル黃疸ヲ呈セシヲ以テ體液洗滌ノ目的ヲ以テ食鹽水注射ヲ施行スル豫定ナリシモ一般ニ島民ハカ、ル處置ヲ好マズ殊ニ本患者ハ一種ノ僻見ヲ有セシヲ以テ一時注射ヲ見合セタリシガ最後ニ至リ民政署管氏ノ懇篤ナル忠告ニヨリ一ハ又親族ノ良好ナル了解ヲ得テ皮下注射其他必要ナル手段ヲ採リシモ事既ニ晚ク食鹽水ノ效力ヲ認ムル能ハザリシコト及本患者ヲ發病當時ヨリ充分ニ觀察スル能ハザリシハ返ヘス返ヘスモ遺憾ナリ。

第三例 森田某 日本人(男) 二十一歳。

初診 大正八年九月二十七日。

主訴 極度ノ倦怠、腹痛、全身痛。

既往症 本患者ハ本島タオンサツク(南拓第二開墾地)農場ニ住シ(本誌第三百五十六號豫報中ノ患者山崎某ト同炊生活ヲ營ムモノナリ)泥瀾ナル開墾地ニ從業スルモノニシテ一箇月前ニ不明ノ熱發アリ三四日ニシテ輕快シタリ然ルニ一昨夕突然惡寒ヲ以テ發熱シ體溫三九・七ニ昇リ昨日モ同様ニテ最高四〇・一ニ昇リ咽喉ヲ始メ全身ニ疼痛ヲ覺エ殊ニ腓腸筋痛甚シク歩行全ク不能トナレリ。

現症 體溫三八・五、脈搏一二〇至。

檢尿 蛋白著明、膽汁色素陰性(第一回)

夕方ナリシタメ眼珠結膜ノ充血ハ之ヲ認メシモ着色如何ハ不明、心窩部殊ニ肝臟部過敏ナリ。

田丸—黃熱ニ就テ

二十八日 眼球結膜黃色トナリ顔面及皮膚稍々着色ス兩耳下腺部腫脹シ疼痛アリ心窩及殊ニ肝臟部過敏ニシテ肝ヲ觸ル脾ヲ觸レズ咽喉始メ全身ノ疼痛依然タリ。

検尿 蛋白強陽性、膽汁色素陽性、反應酸性、比重ハ尿量少ナクシテ計測スル能ハズ(第二回)

檢便 便色ニ特異ナル點ナシ、十二指腸蟲卵。

二十九日 血液検査 異常ヲ認メズ。

檢尿 蛋白及膽汁色素共ニ陽性(第三回)

十月一日 黃色増激シ尿量一般ニ少ナキヲ以テ食鹽水一二〇〇〇(右大腿皮下)ニ注射ス(第一回)

三日 夕方ヨリ蕁麻疹ヲ發シ搔痒アリ。

四日 蕁麻疹全身ニ發シ蕁麻疹ノ發疹ヲ認ム搔痒甚シクタメニ搔破セル痕跡甚シ食鹽水一二〇〇〇(下腹壁皮下)注射(第二回)

五日 發疹尙ホ消失セズ。

七日 蕁麻疹消失ス一般ニ自覺的ニ良好ニシテ殊ニ耳下腺部ノ疼痛ハ殆ド消退セリ併シ尙ホ他覺的ニハ輕度ノ腫起ヲ認ム咽喉始メ腹部殊ニ肝臟部ノ疼痛大ニ消退ス併シ尙ホ腓腸筋痛存ス。

十日 一般ニ良好ナルモ衰弱甚シ。

檢尿 膽汁色素陽性、蛋白陰性(第四回)

十八日 全治退院。

第四例 衛藤某 日本人(男) 二十歲。

初診 大正八年十二月三十日。

二四六

既往症 嘗テ頸腺炎(瘰癧)ヲ患ヒシ外著患ヲ知ラズ昨二十九日農場(イシノム開墾地)ニテ從業中雨ニ濡レ惡寒ヲ感ズ而シテ今日尙ホ出勤從業セントセシモ漸次不快トナリ發熱倦怠甚シキ故受診スト。

現症 體溫三八・五、脈搏一二〇至。

惡寒熱感全身痛食慾缺損ヲ訴ヘ嘔氣嘔吐頻發シ心窩部殊ニ肝臟部過敏ナリ其他眼球結膜充血甚シク一般的重症ナルヲ以テ入院セシム。

三十一日 嘔吐止マズ便通ナシ「リスリン」洗腸一回。

大正九年一月一日、嘔吐止マズ便通アリ黑色硬便。

一般ニ著變ナキモ漸次重症ヲ示ス。

二日 眼球結膜微ニ黃色ヲ現ハス右肋弓下ニ於テ肝臟ヲ觸レ過敏ナリ嘔吐頻發、吐物ハ黑色絮狀ナリ。

檢尿 蛋白陰性、膽汁色素陽性、比重一〇・四、反應酸性(第一回)

三日 吃逆發生シコレガタメニ心窩部及肝臟部益々不快痛アリ嘔吐頻發シ暗黑色稍々粘稠ナリ。

檢尿 蛋白陽性、膽汁色素強陽性(第二回)

尿沈澱物ヲ鏡檢セシモ種々ナル圓柱ヲ認メシ外病原菌等ヲ認メズ。血液検査 異常ヲ認メズ(第一回)

四日 眼球及皮膚ノ黃色甚ク著明トナル嘔吐頻發ス。

此日體溫ハ常溫ニ下降ス、併シ漸ク心臓衰弱ノ徵アリ脈性不安ナルヲ以テ食鹽水(一五〇〇〇)右大腿皮下注射(第一回)カンフル二筒。

五日 吃逆及嘔吐止マズ糞便ハ黑色「テール」様トナリ症狀ノ不良ナルヲ表示ス食鹽水(一五〇〇〇)左大腿皮下(第二回)カンフル二筒。

檢便 寄生蟲卵等ヲ認メズ。

六日 今曉大量ノ暗黒赤色ノ嘔吐アリ此吐物ハ胃壁ニ於テ少クトモ潰瘍狀ノ缺損ヲ生シタル證ニシテ甚ダ危險ナリ脈性不良ニシテ衰弱ノ徵愈々加ハル吃逆止マズ食鹽水(一五〇〇〇)左下腹壁(第三回)。

此日「カンフル」計六筒、「チキタミン」計一筒。

七日 吃逆稍々鎮靜嘔吐ナシ自覺的ニハ甚ダ爽快ナリトイフモ他覺的ニハ心臓衰弱甚シク脈性益々不良ナリ此日朝來便ヲ失禁頻々タリ、便ハ依然黒色「テール」様ニシテ赤色ヲ帶ア。

食鹽水(一五〇〇〇)右大腿皮下(第四回)

此日「カンフル」計六筒、「チキタミン」計一筒。

夜ニ入り一般状態益々不良殊ニ脈不正ニシテ弱シ精神初メテ溷濁ヲ認ム八日 然ルニ拂曉夢尙ホ盛ナル三時急チ告グ之ヲ診スルニ脈甚ダ不良ニシテ速迫頻數シ心音甚ダ不良ニシテ麻痺ノ徵ヲ示ス殊ニ患者ハ精神ノ溷濁増加シ譫語ヲ發シ心臓部ノ苦悶ナルニヤ類リニ左手ヲ以テ心臓部ヲ按捺シ

重患ヲ訴フ呼吸愈々速迫セシチ以テ「カンフル」四筒、「チキタミン」半筒宛二筒連續注射シタルモ益々不良ニシテ脈ヲ觸レザルニ至リ遂ニ前五時半心臓麻痺ノ下ニ鬼籍ニ入ル。

血液検査 異常ヲ認メズ、因ニ本血液ハ前日ニ採取シギョームザ氏法ヲ始メ普通ノ數種ノ染色標本ヲ作りテ放置セシモノニシテ殆ド豫期シタル何物ヲモ認メ得ザリシハ實ニ遺憾トスル所ナリ。

第五例 鮮人(男) 二十一歳。

初診 大正八年十二月十日。

田丸一黃熱ニ就テ

主訴 高度ノ倦怠全身痛、心窩痛等。

既往症 生來健全ノ質ニシテ患者ヲ知ラズ患者ハ本年九月ヨリ本島ニ移住セシモノニシテ十月中ハ汎發性ノ赤痢ヲ患ヒ十一月初旬打撲半ラレテ右頭部ノ切傷左上膊ノ肘關節ニ近ク筋肉ノ斷裂創ヲ作りシコトアリテ十一月二十一日全治セシ新ラシキ既往チ有ス然ルニ本月六日雨中ニ從業(南拓開墾地インネム)セシニ其夜ヨリ發熱シ漸次増惡シテ全身各關節痛食慾不振頭痛歩行不能トナリ殊ニ利尿減少便ハ下利性トナリ昨日來嘔氣嘔吐アリ甚シク倦怠ヲ覺ユト。

現症 體溫三七・七、脈搏九〇至。

眼球結膜充血及著明ナル黃色及從テ全身皮膚ノ黃色ヲ呈ス尙ホ心窩殊ニ肝臟部過敏ニシテ其下緣ヲ觸ル歩行ハ腓腸痛其他衰弱ニテ全ク不能ナリ直チニ入院セシム。

十一日 全身搔痒感アリ食鹽水(一二〇〇〇)右下腹皮下注射(第一回)
十三日 黃色ハ稍々増加シテ著明トナル。

十四日 食觸水(一二〇〇〇)左大腿皮下注射(第二回)

檢尿 蛋白陰性、膽汁色素著明、比重一〇一〇、反應「アルカリ」。

嘔吐ハ時ニアルモアマリ激シカラズ又吐物ニ特異ナル點ヲ發見セズ、便ハ黒色「テール」様ナリ。

十五日 黃色益々甚シク吐物ハ稍々綠黒色ヲ帶ブ。

三十日 黃色大ニ減退セシモ左股腺腫脹シ足背乃至下腿一般ニ浮腫ヲ呈ス。

大正九年一月七日 左股腺化膿セシチ以テ切開。

田丸一黃熱ニ就テ

十九日 左鼠蹊腺腫脹ス。

二十二日 鼠蹊腺化膿セシテ以テ腰髓麻酔ノ下ニ手術ス。

三十日 検尿 蛋白陰性、膽汁色素陰性、比重一〇一五、反應酸性、再來一般ニ經過佳良ナルモ尙ホ入院治療中(二月五日)

第六例 鮮人(男) 二十八歳。

初診 大正八年十二月三十日。

主訴 惡寒發熱全身痛心高痛。

既往症 患者ハ本年九月ホナバ島ヨリ渡來セシ南拓會社労働者ニシテ十一月初旬打撲ヲ受ケ前額前膊ニ擦過傷ノ兩下腿前面ノ挫創ヲ來セシコトアリ本月四日全治セシガ本病ハ開墾地ニ於テ作業ニ從事中四日前ヨリ發熱シ漸次増惡シテ目下ニ於テハ惡寒發熱食慾不振全身痛殊ニ心窩及肝臟部ノ疼痛歩行不能嘔氣嘔吐等ニコマルト。

現症 體溫三八・六、脈搏九六至。

眼球結膜充血、心窩殊ニ肝臟部過敏ニシテ肝チ觸ル一般ニ疑ハシキヲ以テ入院セシム。

三十一日 嘔吐止マス吐物ハ黑色ヲ帶ブ尿利ナシ、眼球結膜黃色ヲ呈ス。

大正九年一月一日 嘔吐止マズ、暗黒帶赤色ノ便ヲ大量ニモラス。

檢尿 蛋白陽性、膽汁色素強陽性。

三日 血液檢査、異常ヲ認メズ。

利尿ナシ譚語ヲ發シ急ニ増激シタル黃色ニ驚キ食鹽水(六五〇)右大腿皮下ニ注射ス。

註 元來食鹽注射ハ早期ヨリ施行スル答ナリシモ注射器ヲ破損シ彼是手

二四八

後レトナリ辛ウシテ本日少量ノ注射ヲ行フヲ得タルナリ。

四日 昨夜來精神異常ヲ起シ激シキ譚語苦悶アリ附添看護人モ夜ノ明クルヲ待チワビタリシガ朝八時ニ至リ急ニ驚クベキ大聲ヲ發シタルヲ余ノ居室ヨリ遙ニ聞キツク直チニ病室ニテ診察セントセシニ早ヤ散瞳シテ心音停止シ何等ノ手段ヲ施ス餘地ナカリキ、元來本患者ハ嘔吐頻發シテ黑色乃至黑赤色ノ吐物ヲ呈シ加フルニ黑赤色ノ血便ヲ頻リニ漏ラシ一般ニ重症ナル上ニ尿利ハ入院以來全量五〇・〇アリシノミ而シテ尙ホ予ノ満足ナル處置ヲ施スノ暇サヘナク恐ク消化管ノ穿孔ニヨリ内出血? ヲ呈シテ頓死セシモノナラント推定ス唯遺憾ナルハ少クトモ局處解剖ヲダニ行ヒ得ザリシ事ナリ。

第七例 ヤールト島民(男) 三十歳。

初診 大正八年十二月十六日(農場出張巡回ニヨリ發見)

既往症 甚ダ不明ナルモ二週間前ヨリ頭痛ニテ臥床セシトイフ目下主トシテ心窩不快頭痛ヲ訴フ歩行不能(其他ハ言語不通ノタメ充分ナラズ)

現症 體溫常、脈搏八一至。

元來二週或ハソレ以上放置セラレタルモノニシテ著明ナル黃色ヲ呈シ心窩過敏ニシテ肝チ觸ル脈性甚ダ面白カラズ甚ダ重態ナルヲ以テ直チニ入院セシム。

十七日 體溫常、脈搏細數。

眼球結膜充血甚シク多數ノ「ロゼオアラ」様ノ皮下溢血アリ殊ニ胸部ニ著明ナリ血便ヲ大量ニモラシ惡臭アリ通譯ヲ以テ問診セシニカ、ル血便ハ今日ガ初メナリトイフ嘔吐モカナリ頻發スルモ吐物ヲ見ズ恐ク單純ノモノヲ

シ。

食鹽水(二〇〇〇) 左大腿内面皮下注射(第一回)

十八日 食鹽水(約三〇〇〇) 右大腿皮下(此日ハ注射器ノ故障ノタメ中止)

二十七日 カクテ漸次益々不食全ク昏睡狀ニ近ク腦症甚シク時ニ種々ノ處置ヲ試ミタカリシガ種々ナル事情ト豫後ノ不良ナルヲ想ヒ遺憾ナガラ殆ド自然ノ經過ヲ待チ(此間十九日ニハ軍艦最上入港シ二十日ハ近藤軍醫二十五日ニハ交通船花咲丸入港シホナベ民政病院院長菱刈警官ノ共同診査ヲ受ク)衰弱ノ下ニ鬼籍ニ入ル。

此患者ハ發病以來二週間バカリハ全ク誰モ知ラレズ入院中モ言語不通ナルト一看護人タルヤールト島民亦黃疸心窩痛ニテ臥床シ一切ノ經過ヲ詳細ニ調査シ得サリシハ遺憾トスル所ナリ。

備考 本屍ハ十二月二十八日前記菱刈警官及同氏ニ隨行セシ甘利助手ノ應援ノ下ニ病理解剖ニ附セリ。

第八例 イロニス モートロツク島民(男) 二十三歳。

初診 大正八年十二月二十四日。

主訴 頭痛、腹痛。

既往症 一週前ヨリ惡寒頭痛發熱腹痛嘔吐アリトイフ(本患者ハ本年九月ホナベヨリ南拓會社労働者トシテ本島ニ渡來シ開墾地ニ起居スルモノナリ)

現症 體温三八・〇、脈搏九九至。

眼球結膜充血、心窩痛殊ニ肝臟部過敏ニシテ肝ナ觸ル殊ニ眼球結膜初メ

田丸 黃熱ニ就テ

全身黄色ヲ呈ス嘔氣嘔吐アリ吐物ハ黄色ナリトイフ(予ハ一回モ見ズ)尿利ハカナリニ存シ便通ハ一日一行位ナリトイフ一般ニ重症ナルヲ以テ入院セシム。

二十七日 食鹽水(二〇〇〇) 右大腿皮下注射。

三十日 全身所々ニ「ロゼオウラ」様ノ皮下溢血ヲ認ム。

大正九年一月一日 一般狀態甚ダ不良ニシテ腦症ヲ發ス、黄色甚ダ著大。

三日 午後四時鬼籍ニ入ル。

備考 本患者モ食鹽水ハ第一回丈クニシテ其後ハ一切注射ヲ承諾セズ遺憾ナカラ自然ノ經過ニ放置セリ。

本患者ニ至リ固形食肉食等食禁ヲ破リ初メテ島民ノ食事攝生ノ甚ダシキ不合理ナルヲ發見ス殊ニ單純ナル頭腦ト衛生思想ナルモノヲ解セザル原始的土人ニ對シテハ最モ嚴重ナル監視ノ下ニ加療セシメザレバ多クハ豫後ヲ不良ニ導キ易キモノナレバ殊ニ本病ノ如キ消化機系統ニ著大ナル解剖的變化ヲ呈スル疾病ニ於テハ特別ニ注意スベキモノト認ム又多クノ新ラシキ治療方法ニ對シテ多年ノ慣習上甚ダシキ困難ニ遭遇スルコト毎常ナレバ此點ニ向テハ大ニ研究考慮スベキモノナリ。

此外ニ

第九例 佐藤某 邦人(男) 二十四歳。

初診 大正八年五月二十七日。

發病 大正八年二月二十五日。

全治 大正八年六月十二日。

田丸—黃熱ニ就テ

第十例 鮮人(男) 二十三歳。

初診 大正八年十一月四日(打撲負傷—左上膊挫創—化膿性筋炎)

發病 大正八年十一月十日。

全治 大正九年一月七日。

第十一例 朴宗達 鮮人(男) 二十四歳。

初診 大正八年十二月十六日。

發病 大正八年十二月十四日。

全治 大正九年一月十七日。

第十二例 ヤールト島民(男) 推定三十二歳。

初診 大正八年十二月十七日。

發病 大正八年十二月二十二日。

全治 大正九年一月三日。

讀者之ヲ諒セヨ。

備考 以上症例中第九乃至第十二例ハ一般ニ輕症ナルヲ以テ省略セリ。

今本病ヲ觀察スルニ便センガタメ以上ノ各症例及前回豫報シタル症例ヲ加ヘテ予ノ赴任以來大正八年度ニ發病シタル全患者ヲ表示シ之ヲ病症日誌ヨリ拔萃シテ考究スレバ

第一表 クサイ島人口表

人種	男	女	計	備考
日本人	六六	八	七四	南洋拓殖工業株式會社使用人 五八
朝鮮人	七三	三	七六	同 七六
本島民	四六七	三八七	八五四	同 五
他島民	八一	三三	一一四	同 一一四
外國人	二	二	四	南洋拓殖工業株式會社使用人 二五三
計	六八九	四三三	一一二二	

備考 本表ハ大正八年十二月九日現在ノ調査ナリ。
 表中備考ノ部ニ南洋拓殖工業株式会社使用人ヲ摘記シタルハ黄熱ノ殆ド全部ガ南拓會社従業員ニ發病スルノ觀アルヲ以テ參考ニ資セ
 ンガタメナリ。

第二表 黄熱患者數

人種	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計	
邦人			一				二				一	五
鮮人			二						一		三	七
本島民							一				一	一
他島民											三	三
計		三		二				三	一		七	一六

備考 本表ハ大正八年三月クサイ醫院設置ノ月ヨリ起算セリ。
 本表中ノ數字ハ同一患者發病ノ月ヲノミ記載シ二箇月以上ノ經過ヲ取ルモノハ省略セリ。
 本表中ノ患者ハ著明ナル黄痘ヲ發シタルモノ、ミチ記載シ疑ハシキモノハ省略セリ。

第三表 百分比例表

人種	黄熱數	全人口	百分率	大正八年 受診總數	平均受診數	同百分率	摘要
邦人	五	七四	六・七六	二七七	二八	一七・八六	

計	一六	一一一八	一・四三	一〇六六	一〇七	一四・九五
他島民	三	一一四	二・六三	六七	七	四二・八六
本島民	一	八五四	〇・一一	四六〇	四六	二・一七
鮮人	七	七六	九・一一	二六二	二六	二六・九二

備考

本表中受診總數ト稱スルモノハ毎月計算ニヨリ合計シタル患者數ニシテ大正八年三月以降十二月全體ヲ含ム此故ニ平均受診ト稱スルハ同一患者ニシテ一箇年一度受診セルモノトシテ算出シタリ從テソレニ對スル百分比例ハ比較的黃熱ノ統計ヲ見ル上ニ公平ナラント推定セシニヨル。

尙ホ本表中他島民ノ平均受診數ノ少ナキハ其大部分ハ大正八年九月末及十二月中ニ渡來セシモノナレバナリ。

第四表 一般症候及經過表

人種	姓名	性別	年齢	發病月日	發病ノ誘因	經過日數	併發症	黃痘	轉歸
邦人	山猪	男	二二	四月一九日	本島チオンサツク海岸ニテ夜中坐睡中雨ニ濡ル	四六日	中等度ノ腦症、黃視、毒麻疹、六日間無尿、左耳下腺炎、搔痒	四月二十三日發生	六月三日全治
同	佐巳	同	二四	五月二五	濕潤セル泥土ノ中ニ測量ニ從事中發病	一八	ナシ	六月二日發生	六月十二日全治
同	高志	同	一八	九月一五	不詳	二	皮膚搔痒、黃視	九月二十日發生	十月六日全治
同	森留	同	二二	九月二五	泥土中ニ測量ニ從事中發病	二三	耳下腺炎、毒麻疹、初期ヨリ全身痛歩行不能等	九月二十八日發生	十月十八日全治
同	衛豐	同	二〇	一一・二九	鮮人ヲ監督シテ雨中ニ作業ス	一一	吃逆、吐血、下血等、嘔吐	大正九年一月二日發生	大正九年一月八日心臓麻痺ニテ死亡

田丸一黄熱ニ就テ

備考 本表中邦人及鮮人ハ皆南拓會社使用人トシテ大正七年度ニ内地ヨリ渡來シタルモノ又ハ最近本群島中ノホナベ島ヨリ移入シタルモノナリ。
 本表中ノ本島民ジエークハ三年前迄數年間英領ナウル島ニ渡航シタルモノニシテ本島ニ於テ最近南拓開墾地ニ入り伐材開墾ニ從事中發病シタルモノナリ。
 本表中ノ終リノ三人ノ島民ハ何レモ最近ホナベ島ヨリ南拓會社労働者トシテ移住シタルモノナリ。

二五三

鮮人	都正五	同	二一	四、一五不詳	一二	頸腺頸下腺鼠蹊腺腫脹	日誌不備 推定四月二十日發生	四月二十七日全治
同	鄭夫實	同	二〇	推定 四、一六同	一三ナシ		日誌不備 推定四月十八日發生	四月二十九日全治
同	崔光吉	同	二一	五、〇二同	一ナシ		五月五日發生	五月十二日全治
同	朴昌玉	同	二三	一一、一〇 不詳サレトモ八日前ニ打撲サレ重傷ヲ負フ	五八 左上膊ノ打撲傷アリ化膿性筋炎トナル		十一月十二日發生	大正九年一月七日全治
同	趙雲龍	同	二二	一二、〇六 一箇月前ニ打撲サル尙ホ雨中ニ作業ス	尙ホ入 左腋窩腺左股腺及同鼠蹊腺何レモ化膿ス		十二月十日初診時既ニ發生ナシテレリ恐ク八日位前ニ發生セシカ	大正九年一月申入院經過中
同	朴宗達	同	二四	一二、一四 作業中雨ニ濡レル四十日前ニ打撲サル	三五 頑固ナル嘔吐		十二月二十一日發生	大正九年一月十七日全治
同	崔任祚	同	二八	一二、二六 五十日前ニ打撲ヲ受ケ作業中雨ニ濡ル	一四 無尿、下血、腦症		十二月三十一日發生	大正九年一月四日死亡 (腹腔穿孔ト推定)
本島民	ジエーク	同	三八	九、一二 南拓開墾地ニテ開墾從業中多量ニ水ヲ飲用ス	一一 腦症		九月十九日初診時ニ著明ニ著色ス(九月十五日頃發生ト推定)	九月二十二日死亡
ヤールト島民	ラボリチ ヨーク	同	三〇	推定 一二、〇二 不詳	二五 下血、吐血、雜聽		十二月十六日初診時高度ノ著色(十二月十日頃發生ト推定)	十二月二十七日死亡
同	レーリン	同	推定 三三	推定 一二、二二 前患者ノ看護ニ従事ス	一三ナシ		十二月二十五日初メテ發見セシモ恐ク二三日前ノ發生ナラン	大正九年一月三日
モートロツク島民	イワニス	同	二三	一二、一九不詳	一六 腦症		十二月二十四日初診時著明ニ著色ス推定十二月二十一日發生	大正九年一月三日死亡

第五表 (同) 排泄物其他

人種	姓名	嗜好	出	嘔吐	尿	糞	其他
邦人	山猪	暗赤色ノ喀痰 肺蛭卵ヲ見ル		嘔氣アルモ嘔吐ナシ	發病後七日間無尿 蛋白+ 弱「アルカリ」 膽汁色素++	灰黑色軟泥狀「アンキロ」 卵ヲ見ル	肝ヲ觸レル、腺ヲ觸レズ、皮下 溢血多シ、球結膜充血
同	佐巳	ナシ		ナシ	蛋白極微 膽汁色素極微	灰黑色	心窩過敏ナルモ肝脾ヲ觸レズ、 球結膜充血
同	高壽	衄血多量、喀血少量		ナシ	蛋白一 膽汁色素+	日誌ニ記載セス	肝腫大ス、脾ヲ觸レズ、皮膚極 痒、球結膜充血、耳鳴、不眠等 アリ
同	森留	ナシ		ナシ	蛋白++ 膽汁色素++	綠黑色 十二指腸蟲卵	肝腫大ス、脾腫ナシ、球結膜充 血、蕁麻疹、搔痒
同	衛豐	ナシ		黑色乃至暗赤色液大量 尿量甚ク微量	蛋白+酸性 膽汁色素+ 尿量甚ク微量	暗黑色「テール」様乃至暗 黒赤色	肝腫大ス、脾腫ナシ、點狀皮下 溢血、球結膜充血
鮮人	都正五	ナシ		嘔氣アリ 嘔吐ナシ	不明(檢セス)	不詳(日誌ニ記載セス)	
同	鄭光質	不詳		フ受診前ニ頻發セシトイ	不明(檢セス)	不詳	
同	崔光吉	不詳		不詳	蛋白一 膽汁色素+	不詳	肝腫大ス、脾腫ナシ
同	朴昌玉	ナシ		綠黄色	檢セズ	黄黑色水様	肝腫大ス、脾ヲ觸レズ
同	趙雲龍	ナシ		頻發 帶黄黑色	蛋白一弱「アルカリ」 膽汁色素++	黑色「テール」様	肝腫アリ、心窩痛、脾ヲ觸レズ、 皮膚搔痒、球結膜充血
同	朴宗達	ナシ		頻發 黄色乃至帶黑色	蛋白一 膽汁色素+	黄灰色	肝腫ル、脾腫レズ
同	崔任祚	ナシ		頻發 黑色乃至帶黒赤色	蛋白+ 無尿六日 膽汁色素++ 全量五〇〇ノミ	暗黒色乃至帶黒赤色「テ ール」様	肝腫レル、脾腫レズ、球結膜充 血

田丸—黄熱ニ就テ

月	降雨總量	降水日數	降水強度	摘 要	東京ノ降水量	熊本ノ降水量	札幌ノ降水量	臺南ノ降水量
一月	四一〇・五〇 ^m	九	四五・六一 ^m		五八・八〇 ^m	六九・六〇 ^m	六七・七〇 ^m	二八・七〇 ^m
二月	四〇・二〇	八	五・〇二		六九・〇〇	六六・一〇	一〇四・四〇	三四・五〇
三月	七六一・七〇	一八	四二・三三	クサイ醫院設置	一一二・七〇	一二九・七〇	五八・八〇	三八・七〇
四月	二八〇・四〇	一二	二三・三七	邦人一、鮮人二、發病	一二七・七〇	一六三・六〇	五一・八〇	五五・七〇

第六表 降水表

尙ホ降水ト本病トノ關係セル點ヲ表示センタメニ南拓會社開墾地ニ於ケル大正八年度ノ降水量ヲ示シ之ヲ本邦ニ於ケル二三ノ地方ト比較セン。

本島民	ジエーク	ナシ	不詳ナル血液ヲ吐出セシコトアリトイフ	蛋白極微 膽汁色素+	不詳、便秘?	肝觸レス、腺腫ナシ
ヤールト島民	ラボリチ ヨーク	蝨血アリ	不詳	檢セズ	黒色乃至紅色血便	肝觸ル、脾觸レス
同	レーリン	ナシ	ナシ	檢セズ	不詳	患者ハ前患者ノ看護人タリシモノニシテ前患者ノ死亡後無斷外出シテ來ラズ
モートロツク島民	イロニス	ナシ	不詳	蛋白微 膽汁色素+	黄綠色乃至黒色乃至暗赤色	肝チ觸レル、脾腫ナシ、點狀皮下出血斑アリ

備考 土人患者ニ就テハ一般言語ノ通ゼザルト彼等ノ惡習慣ノタメ排泄物等ノ検査甚ダ困難ナリ。
本表外ニ多クノ患者ニ對スル血液尿沈澱物等ノ顯微鏡的検査アレトモ目下研究中ニ屬スルヲ以テ他日發表スベキ期迄報告ナシ得ザルヲ遺憾トス。

田丸—黄熱ニ就テ

二五六

五月	四二五・三五 ^m	二六	一六・三六 ^m	邦人一、發病	一五〇・二〇 ^m	一七五・三〇 ^m	六一・一〇 ^m	一四六・〇〇 ^m
六月	三八三・四〇	二九	一三・九一		一六九・五〇	三一五・六〇	六三・二〇	三五七・九〇
七月	四二一・七五	三〇	一四・五八		一四三・七〇	二九三・四〇	八四・一〇	三五三・〇〇
八月	四四五・五〇	三〇	一四・八五		一四〇・二〇	一七六・〇〇	九四・七〇	二五七・三〇
九月	三〇八・七五	三〇	一〇・二九	邦人二、島民一、發病	二二三・四〇	一六一・一〇	一三五・九〇	一三八・〇〇
十月	五九三・九〇	二六	二二・八四		一八三・四〇	一〇一・四〇	一〇六・四〇	三七・八〇
十一月	三六三・〇五	二五	一四・五二	鮮人一、發病	九七・七〇	六五・四〇	九五・八〇	二〇・七〇
十二月	五二六・三〇	二六	二〇・二〇	邦人一、鮮人三、島民三、發病	五三・四〇	五一・八〇	九三・〇〇	八三・〇〇
計	四九六〇・八〇	二六九	一六名		一三三六・三〇	一七六九・〇〇	一〇一六・九〇	一四七六・六〇
平均	四一三・四〇	二二二	二〇・三二		一一一・三六	一四七・四一	八四・七四	一二三・〇五

備考

本表ニヨリ本島ニ於ケル雨量ノ如何ニ豐富ナルヤ一見明カナリ。

本表ニヨリテハ發病者絶對雨量又ハ降水強度トノ關係ハ一見斷言スベカラザルガ如シト雖試ミニ「第四表」ト對照スルニ重症者ノ殊ニ降水ト關係アルチ知ル即チ山猪ノ四月十九日(降水三六・〇)島民シエークノ九月十二日(降水四一・三)趙雲龍ノ十二月六日(降水七五・五)衛豐ノ十二月二十九日(降水四七・五)等ハ最も著明ナルモノナリ併シ他島民ノ發病月日ハ降水ト反比ヲ示セルモコハ余ノ推定月日ノ多キト又一六死ノ轉歸ヲ取リシト雖看護攝生等ノ不合理等ヨリ漸次増悪シタル傾キナキニアラズ以テ反證トスルニ足ラザルナリ。

以上ノ症例及其統計表ニヨリ當時ニ於ケル熱性黃疸ノ臨牀的症狀ニ就テ予ハ一般的ニ觀察スル機會ヲ得タルヲ信ズ茲ニ於テ少數ノ參考ト予ノ經驗ニ徴シ聊カ概論スル所アラントス。

第一 原因論。

野口博士ハ一種ノ「スピロヘータ」ヲ發見シテ本病々原體ナリトシ其形態性質等ワイル氏病ノ「スピロヘータ」ニ類スルモノトセルモ果シテ如何ナルモノニヤ兎モ角「ステゴミア」屬ノ蚊 (*Stegomyia calopus* 俗稱虎蚊 *Tiger mosquito*) ニヨリ病毒ノ傳搬サル、モノナルコトハ多クノ先輩學者ノ實驗的ニ證明スル所ナルモ予ノ淺學未ダ實驗研究中ニ屬シ確證スルノ域ニ達セズ (絶海ノ孤島ニ於テ適當ナル研究機關ヲ具備セズ有力ナル參考書ヲ有セズ況ンヤ師事スベキ先輩ナキハ遺憾トスル所ナリ) 少クトモ今日迄ノ實驗ニ徴スルニ蚊ト土壤 *Boden* 殊ニ貯溜水乃至ハ天候殊ニ雨量等ト至大ノ關係ヲ有スルモノナルコトハ推定スルニ餘リアリ少クトモ興味アル未來ヲ有スル問題ナルヲ失ハズ。

(イ) 土壤ニ就テハ未ダ其分析表ヲ示スヲ得ザレドモ數十年間「マングローブ」*Mangrove* (熱帶殊ニ此南洋群島ニ於テ何レノ島ニモ認メ得ル海岸海水中ニ密生セル喬木ナリ) 椰子 *Palme* 其他雜木ヨリ成ル鬱蒼タル森林ノ間ニ沈澱シテ發生シタル粘着性ヲ有スル泥土質ニシテ開墾前ハ泥土中ニ人體ヲ全部没入スルコト珍シカラズ其後ト雖森林ヲ伐採シ開墾シテ排水溝ヲ設置シ土壤ノ乾燥法ヲ講ジタル場所ト雖降水激シク持續スル場合ニハ尙ホヨク半身ヲ没入シ得ル土質ニシテ有機質ニ富ミ其反應ハ土壤ハ中等度乃至ハ強酸性ヲ呈シ貯溜水ハ弱酸性流水 (現ニ飲料ニ供スルモノ) ハ中性ナリ。

(ロ) 土壤ト蚊殊ニ其幼蟲トノ關係ハ今尙ホ發表ノ機ニ至ラズ。

(ハ) 本病ト氣候トノ關係ハ元來當島ノ氣溫ヲ既往ノ報告及予ノ過去一箇年ノ觀察ニ徴スルニ一箇年ヲ通ジテ氣溫ノ變化極メテ少ナク朝又ハ夜ノ最低華氏ノ七十四度日中ノ最高九十一度ニシテ而モ此最低溫度ハ連日降り續ケル雨天ノ場合等ニ遭遇スルモノナリ普通ハ朝ノ八十度日中ノ八十八度夜間ノ八十二度テ示度最モ多ク彼ノ先輩成書ニ報

告セル條件ニ最モ適合セリ尙ホ湿度トノ關係モ必要ニシテ天候晴レ渡リ氣壓ノ高度ナル場合ニハ發病者一般ニ少ナキモ兎角雨天續キノ場合及殊ニ雨後ニ於テヨク發病者ヲ認識セリ就中雨ニ濡レルテフコトハ最モ著明ナル誘因トナルコト多ク之ニ準シテ一般ニ雨量ノ多キ月ニ發病セルモノ亦多キ事實ヲ示セリ。

(ニ) 一般ニ青壯年ノ男子ニ發病者多ク注目スベキ點ナルモ作業ノ性質上(森林伐材開墾等)青壯年ノ男子ヲ要スル次第ニシテ(内地邦人及鮮人中ニハ女子ノ移住者殊ニ勞働者一人モナク又南洋群島ノ土人ハ一般ニ女子ニ勞働セシメズ殊ニ本島ノ如キハ極端ナル女尊男卑ノ風アリ)此點ニ就テハ今尙ホ斷言スルニ早期タルヲ免レズ將來ノ統計ニ徵スルノ必要アリ。

(ホ) 本病々原體ノ「スピロヘータ」Spirochaeta モシクハ之ニ類スルモノナランコトハ吾人トシテモ最モ思ヒヲ致シタル點ニシテコレニ向テハ種々ナル検査ヲナシ今尙ホ研究中ニ屬スルモ發見確定スルノ機運ニ達セズ之ニ就テハ軍艦最上ノ近藤軍醫及ボナベ民政病院ノ菱刈醫官兩氏ノ如キハ最近ニ於テ態々特別ニ援助セラレ共ニ其檢索ニ勉メシモ不結果ニ終ハリシヲ遺憾トナス又病原菌トシテ他ニ何物モ得ル所ナカリキ併シ吾人ハ尙ホ此點ニ於テ最モ興味アル未來ヲ有スルモノナルコトヲ豫言セントス。

終リニ茲ニ適當ナル培養試驗的竝ニ動物試驗ヲナシ得ザリシハ殊ニ遺憾トスル所ナリ。

(ヘ) 之ヲ要スルニ顯微鏡的乃至超顯微鏡的微生物ガ「ステゴミア」屬蚊ニヨリ間接ニ人體ニ侵入スルカ或ハ所謂ワイル氏病ノ如ク泥土中ヨリ直接ニ皮膚ニ侵入スルカ又ハ經口的ニ消化機ヨリ侵入スルカ或ハ此總テノ侵入經路ヲ可能ナラシムルカ或ハ豫メ人體ニ侵入シタル病原體ガ天候ノ激變心身ノ變動等ニヨリ急ニ病毒ヲ逞シクスルニアラザルガ之ヲ實際ニ徵スルニ發病者ノ殆ド全部ガ勞働者殊ニ泥濕ノ地ニ作業スルモノナルコト及内地人始メ一般ニ島民ニ至ルマデ大體ニ皮膚ノ損傷殊ニ種々ノ皮膚病ヲ有スルコト生活程度ノ低級ナルコト等發病ノ誘因トナルコト多ク事務所員其他比較的高等ノ生活ヲナスモノ及殊ニ實地ニ農場ニ出入セザルモノニハ罹病者嘗テナカリシ點等甚ダ

興味アル所ナリ。

(ト)更ニ感受性ニ就テ人種上ヨリ之ヲ見ルニ成書ニ報告スル如ク元來ノ土人ノ之ニ侵サル、コト少ナク他島ヨリ來リタル土人若クハ本島民ナラバ一時他島へ移住シテ歸來シタルノ既往ヲ有ス其外人種ノ高等ナルモノハ感受性強ク又症狀モ重症者多キガ如シ唯併シ予ノ實驗例中島民ノ罹病者多ク死亡者モ殊ニ多數ニ昇リタルガ如キモコハ一般ニ衛生思想單純ニシテ看護攝生ヲ守ラズ言語ノ通ゼザルタメ充分ニ意志ノ疏通ヲ計ル能ハザル缺點モアレドモ吾人ノ新シキ處置ハ勿論理想ニ近キ處置ヲナシ得ザリシモノ皆然リ朝鮮人ノ如キモ幾分コレニ類似シテ非衛生的ノ習慣ノ久シキ頭腦ノ幼稚ナル等何レモ不良ノ結果ヲ來ス因タラズンバアラズ其結果ノミヲ以テ輕重症ヲ判別スルハ尙ホ早計タルナリ。

第二 症候論。

作業中多クハ雨ニ濡レテ後數時間内ニ惡寒ヲ感ジ早キハ即日晩キハ翌日惡寒戰慄ヲ以テ或ハ自然ニ發熱シテ三十九度乃至四十一度近ク昇騰ス。(大多數ノ患者ハ農場ト病院トノ交通不便ナルタメ發病ノ初期ヨリ診察スルコト少ナシ)而シテ稽留スルコト二三日ニシテ頓ニ分利スルカ或ハ一週位ノ後ニ漸次ニ下降スルモノニシテ脈ハ初期ヨリ頻數シ九〇乃至一二〇至或ハソレ以上ニ進ムコト稀ナラズ殊ニ予ノ奇異ニ感ジタルハ黃熱トシテ成書ノ記載スル所ニヨレバ多クハ初メ脈數稍々増加スルモ暫時ニシテ甚ダ減少シテ所謂「フアジエツト」[Faget]ノ徵候ヲ呈スル如クナルモコハ普通ノ「カタール」性黃疸ニハ最モ屢々發現スル現象ト稱スルヲ得ルモノ予ノ實驗スル所ハ黃疸ノ著明ニ發現シ稍々進行セルモノニアリテモ殆ド脈數ノ減退セシモノニ遭遇セズ此點ハ尙ホ將來ノ統計ニ徵スルノ外ナク殊ニ症狀ノ險惡ニシテ豫後ノ不良乃至ハ數日ノ内ニ死ノ轉歸ヲ取ル如キ場合ニハ益々脈數ノ頻數スルモノナリカクテ熱ハ解熱後平溫乃至ソレ以下ニ持續スルモノ最モ多ク稀ニ一兩日ノ後體溫ノ上昇シテ三十八度以上トナルコトアリ併シ豫後不良ニシテ死ノ轉歸ヲ取リシ多クノ患者何レモ常溫乃至ソレ以下ニ於テ持續セシモノナリ。

黃疸ハ最も主要ナル症候ナルモ初メ二三日間ハ多クハ發現セズ甚シキハ十日早キハ三四日位ノ經過中ニ發來シ數日ノ經過中ニ消失シテ普通ノ「カタル」性黃疸ト區別シガタキ輕症モアレドモ多クハ漸次増悪シテ黃視ヲ發シ皮下溢血乃至指壓ニヨリテ消退セザル「ロゼオーラ」様ノ出血班ヲ發來スルコト稀ナラズ尿中ニハ早クヨリ膽汁色素ノ反應ヲ證明シ得ルモノナリ此黃疸ハ種々ナル合併症ヲ發シテ經過ノ遷延スル如キ場合ニハ比較的永ク存続シ數週乃至數箇月ニ亙ルモノアリ黃色ノ消退スルト同時ニ通常著明ナル貧血ヲ呈シ顔面始メ皮膚一般ニ蒼白色ヲ呈スルモノ多シ。

尿ハ全ク無尿ナルカ或ハ甚シク減量シ比重ニハ著明ナル變化ナク尿中ノ蛋白質ハ多クハ初期ヨリ發現シ膽汁色素ノ未ダ發現セザル場合ニ早ク證明シ得ルコト屢々ナリ殊ニ多クノ症狀ノヨク本病ト類似シテ何等區別シ能ハザル如キ場合ニ於テ獨リ黃疸乃至尿中膽汁色素ヲ證明シ得ザルガ如キ場合ニ尙ホヨク屢々蛋白ヲ證明セシコトアリ反應ハ多クハ弱「アルカリ」性若クハ弱酸性ナリ尙ホ尿中沈澱物中ニハ種々ナル圓柱ヲ認メシコトアレドモ病原菌乃至其他超顯微鏡的微生物ヲ認メシコト未ダナシ唯一回本病ノ症狀ニ酷似シテ黃疸ヲ缺ケル患者ノ尿沈澱物ヨリ普通大腸菌ノ純培養狀ナルヲ認メシコトアルモコハ或ハ他ノ原因ナリシヤモ知レズ其外尿ノ色ハ彼ノ黒水熱ノ如ク黒色ヲ帶ビズ綠黄色ナルコト多シ併シ尿色ハ黃疸ノ程度ニヨリ一定セザルコト勿論ナリ。

特異ナルハ初期ヨリ發現スル眼球結膜ノ充血ナリ彼ノワイル氏病ノソレトヨク類スル點ニシテ終リニ至ル迄殊ニ死ノ轉歸ヲ取ル如キ症狀險惡ノ場合ニハタトヒ無熱ノモノト雖眼球結膜ノ充血著明ナリ此充血ハ恢復期ニ向フト共ニ漸次消退スルモノナリ。

其外特異ナルハ多クハ初期ヨリ發來スル嘔氣乃至嘔吐ニシテ殊ニ嘔吐ハ殆ド必發症候ノ一ニシテ初メハ單純ノ吐物ナルモ漸次黃色乃至黒色トナリ而モ其吐物ハ恰モ煤様ノ外觀ヲ呈シ進ンデ激症ニ於テハ暗黒赤色ヲ呈スル大量ノ液ヲ吐出スコレニ同ジク糞便ハ初メハ下利又ハ便秘スルモ二三日中ニハ多クハ下利ニ傾キ綠色ヲ呈シ漸次黒色軟便

トナリ後ニハ全ク黑色「テール」様トナリ名狀シガタキ惡臭アリ時ニハ吐物ト同ジク暗黒赤色乃至赤色ノ血性便ヲモ
ラスコトアリ何レモ消化機粘膜ノ潰瘍乃至穿孔様ノ解剖的變化ヲ想像セシム。

心窩部及殊ニ肝臟部ハ初メヨリ自發的乃至他壓的ニ疼痛アリ肝臟ハ多クハ腫大シテヨク觸診シ得殊ニ壓ニヨリ過
敏ナリ併シ脾臟ヲ觸レ又ハ其部ノ疼痛ヲ感ゼシモノ未ダ嘗テ遭遇セズ其他腹部ニハ著明ナル變化ナク稀ニ中等度ノ
鼓脹ヲ認メシコトアリ。

下肢殊ニ腓腸筋痛ハ初メヨリ著明ニシテ全ク歩行シ得ザルモノ比々皆然リ尙ホ激烈ナル場合ニハ僅ニ下肢ヲ移動
スルカ又ハ膝ヲ立テル運動スラ全ク不能ナリ。

腰痛始メ全身各關節痛ハヨク遭遇スル症狀ニシテ殊ニ咽喉痛トシテ乃至ハ嚙下痛トシテ訴ヘヲ聞クコト屢々ナ
リ。

血液ニ就テハ未ダ精密ナル調査ヲナシ得ザルモ血球ノ型態ニ變化アルヲ認メズ本病ハ出血素質ヲ増加スル傾向ア
リ皮下溢血衄血吐血喀血乃至下血等ハ甚ダヨク觀察スル症狀ニシテ試験管ニ採取セシ血液ハ凝固性甚ダ少ナク解剖
的ニモ心臓内ノ血液ノ如キハ全ク濃稠ナル流動性ヲ呈ス其原因調査ニ於テ血液ニヨリ検査シタルアラユル方法ニヨ
リ病原體及著明ナル變化ハ今日尙ホ發見シ得ザルヲ遺憾トナス。

其他熱ニ伴フベキ頭痛腰痛食慾缺損等普通ノ場合ト同シ。

本病ノ合併症トシテハ淋巴腺ノ腫脹疼痛乃至化膿スル場合比較的多ク就中耳下腺ヲ侵スモノ最モ多シ其他腋窩腺
股腺鼠蹊腺等ヲ侵シタル例モアリ全身ノ關節痛ハ殆ド必發ノ自覺症ナリ就中咀嚼運動及嚙下運動障害等ハ屢々訴ヘ
ラル、症狀ナリ其他橫膈膜ノ痙攣即チ吃逆ハ甚ダ屢々遭遇シ危險ナル合併症ノ一ナリ尙ホ特筆スベキハ黃疸ニ伴フ
黃視及視力障害ハ殆ド毎常發來スル症狀ニシテ腦症ノ合併若クハ續發ハ恐ルベキ徵候ニシテ其程度ハ最モ豫後ニ大
ナル關係ヲ有スルモノナリ。

第三 經過論。

成書ニヨレバ潜伏期トシテ二日乃至七日トイフ人アリ又ハ突然發熱ストイヒ確然タル證明ヲ有セザレドモ予ノ實驗ニ徴スルニ突然惡寒ヲ以テ發熱セシ場合アリ二三日ノ前驅期ラシキ場合モアリ或ハ全然不明ナルアリ動物試驗又ハ多數ノ統計ニ徴スルノ外ナシ而シテ發熱スレバ二三日乃至一週間稽留スル高熱ヲ發シソレヨリ急ニ下利シテ恢復期ニ入ルカ又ハ二三日後ニ再ビ發熱シテ回歸熱様ノ經過ヲ取ルアリ或ハ激烈ナル黃疸ヲ發シ熱ノ下降期ニ入ルト共急ニ心臟ノ衰弱スルカ又ハ高度ノ黃疸ニ由來スル中毒現象ニヤ激烈ナル腦症ヲ發シテ十日前後ノ經過ニテ死ノ轉歸ヲ取ルアリ甚シキニ至リテハヘイエイニヨレバ發病後二三日中ニ尙ホ本病ノ症狀ノ備ハラザル時既ニ鬼籍ニ入ルアリ死後ニ至リテ皮膚ノ黃色ヲ發見スルコトアリトイヒ其猛烈ナル疾病タルヤ明カナリ或ハ臨牀上多クノ症狀具備シテ何等本病タルヲ凝フノ餘地ナキ場合ニ獨リ黃疸乃至尿中ノ膽汁色素ヲ缺キ極メテ輕症ノ經過ヲ以テ全經過二週位ニテ治スルアリ或ハ種々ナル合併症就中淋巴腺ノ化膿ヲ發シテ數週乃至數月ニ互ルアリ。

第四 豫後論。

本病ノ豫後ハ甚ダ慎重ニ考究スル必要アリ何トナレバ初メ普通ノ如ク善良ナル經過ヲ取ル如ク見ユルモ一朝ニシテ併發症ヲ發スルカ又ハ殊ニ攝生就中食事攝生ヲ守ルト否トニヨリテハ急ニ不良ナル經過ニ終ハルモノアリ殊ニ本病ノ解剖的ニモ消化機ニ著大ナル變化ヲ與フル點ヨリ考フルモ此食事攝生ハ甚ダ豫後ニ重要ナル關係ヲ有スルモノナリ其他嘔吐殊ニ黑色乃至血性嘔吐ヲ發スル場合又ハ黑色「テール」様乃至血性下利ヲ呈スル場合腦症ノ長ク持續スル時吃逆、無尿乃至ハ尿ノ大減少セル場合ニハ多クハ豫後不良ナリ予ハ嘗テ呼吸器ニ併發症ヲ發シタルモノヲ見ザレドモ元來本病ノ臨牀的症狀タル一種ノ中毒現象ト認ムベキモノナルヲ以テ心臟ノ抵抗力強弱如何ハ最も豫後ニ重大ナル意味ヲ與フルモノナリ。

第五 類症鑑別論。

以上記載セシ所ヲ綜合シ之ヲ最モ類似スル疾病ト比較スルニ

I 黒尿熱 Schwarzwasser Fieber, Black water fever

名ノ如ク黒色ノ尿ヲ漏ラスモ黃熱ニハ黃色尿ヲモラス又黒尿熱ニハ多クハ「マラリヤ」ノ既往ヲ有スルカ又ハ「マラリヤ」流行地ニ多キモ黃熱ハ一般ニ稀ナルガ少クトモ本島ノ如キニハ「マラリヤ」ヲ有セザルノミナラズ「アノフェレス」蚊ヲ認メズ勿論血液検査ヲナセバ自ラ區別スルヲ得其他脾臟ノ變化ノ有無ハ注目スベキ點ナリ人ニヨリテハ黃熱ニ脾ノ腫脹ヲ認ムルモノナキニアラザレドモ予ハ臨牀的ニモ解剖的ニモ信ゼズ。

2 回歸熱 Rückfallfieber

特異ナル熱型アリ經過ヲ觀察スル場合及血液検査ニヨリ特異ナル病原「スピロヘータ」ヲ發見ス。

3 ワイル氏病 Weilsche Krankheit 稻田氏ノ所謂黃疸出血性「スピロヘータ」病。

最モ混同シヤスク又最モ類似スル疾病ニシテ予ハ臨牀的症狀ニ於テモ亦多クノ成書ノ報ズル所ヲ綜合スルモ或ハ同一疾病ナラザルナケンヤヲ疑フ一人ナリ又野口博士ノ發見セラレタル「スピロヘータ」ノ酷似スルテフコトヲ考フルモ此兩症ノ區別ニ就テハ慎重ニ考究スベキ問題ナリ併シ今成書ニ現ハレタル症狀竝ニ殊ニ予ノ實驗シタル熱性黃疸ニ對スル臨牀的ノ區別點ヲ述ブレバ

ワイル氏病ノ病原體ハ特異ナル「スピロヘータ」ナルコトハ稻田氏ニヨリテ確證セラレタルモ黃熱ノ病原體ハ永ク分明セズ最近野口博士ニヨリテ發表セラレタル「スピロヘータ」モ未ダ全世界ノ承認スルニ至ラズ我所謂熱性黃疸ニ就テハ未ダ嘗テ稻田氏ノワイル氏病「スピロヘータ」ヲ認ムル能ハズ併シナガラ此病原體ニ就テハ最モ興味アル未來ヲ有スルモノナリ。

ラズ併シ黃熱ハ熱帶病トシテ華氏七十四度以上ノ溫度ニアラザレバ發病セズ。

井戸氏ニヨレバワイル氏病ハ「アルカリ」性乃至中性土壤ニ好ムデ發病スト雖予ノ黃熱樣疾患ハ酸性（強酸性又ハ中等度ノ酸性ヲ呈ス）土壤（水ハ弱酸性ヲ呈シ流水ハ中性ナリ）ニ發病セリ。

ワイル氏病ハ青壯年ノ男子ヲ侵スト雖予ノ熱性黃疸モ恰モ青壯年ノ男子ノミ罹病セリ併シ當地南拓會社ノ開墾地ノ狀況トシテ青壯年ノ男子ノミ從業シ其他ノモノハ發病スベキ原因乃至誘因ニ際會スルコトナシ未ダコレヲ以テ斷定スル能ハズ此點ハ將來統計ノ觀察ヲ待タザルベカラザルナリ。

尙ホ症候ニ就テハ黃熱ニ於テハ心窩部殊ニ肝臟部ノ自發痛乃至壓痛アリ肝臟ハ解剖的ニモ著明ニ腫大シヨク觸診上多クノ場合ニ觸レルモ脾臟部ノ壓痛及觸診上脾ノ腫大ヲ觸レシコトナシ學者ニヨリテハ種々區別シガタキ報告ヲナセドモ兎モ角ワイル氏病ニ於テハ脾ノ變化殊ニ腫大ニ重キヲ置ケリ但シ本邦ニ於ケルワイル氏病ニ就テハ稻田氏等ハ脾ニ著明ナル變化ナキコトヲ報告セラル。

特異ナルハ黃熱ニ於テハ尿量ノ減少乃至缺如予ノ例ノ如キハ一週間ニ互リテ無尿ナリシコトアリ嘔吐ノ頻發而モ吐物ハ黑色乃至黑赤色糞便ハ黑色「テール」樣乃至暗黑赤色流動性ナルモワイル氏病ニ於テ排泄物ニ就テ特異ナル報告ナシ。

此臨牀上ノ變化ハ解剖的ニモ殊ニ肝、脾ノ狀況ハ予ノ實驗セシ所ニシテ又吐物及糞便ニ對スル説明モ解剖的ニ消化管ノ變化ヲ證明シ得タリ併シ病理的ノ變化等ニ就テハ今尙ホ發表スル能ハズ後日報告スベキコトヲ期ス。

第六 終結。

本稿ヲ終ハルニアタリ一言セントス予ノ所謂黃熱？果シテ眞ノ黃熱ナリヤ或ハワイル氏病ナリヤ將又「クサイ」熱ト稱シツ、アリシ如ク一種特異ナル疾患ナリヤ尙ホ未ダ斷案ヲ下スベキ時機ニアラザルモ彼ノ黃熱ナルモノ純學問的ニ命名セラレタルモノニアラズシテ症候的ニ命名セラレタルモノナリトセバ予ハ當地ノ熱性黃疸ヲ以テ黃熱ト稱

スルニ隣接スルモノニアラズ併シナガラ今尙ホ病原體ヲ發見シ得ズ有力ナル參考書ナク殊ニ最近發表セラレタル野口博士ノ報告スラ手ニ得セザルハ千歳ノ恨事トスルモノナリカリニ本病ヲ以テワイル氏病ナリトセバ果シテ如何ニシテ此絶海ノ孤島ニ病原體ヲ搬入シタルヤ我占領セル全南洋群島ニ於テ未ダ本病ニ類スルノ報告アルヲ聞カズ又本病ノ本島ニ於ケル歴史ハ土人ノ言ニ徵スルモカナリ古キモノニシテ本邦内地ト本島トノ交通乃至ハ濠洲又ハ布哇等トノ交通ニシテモ病運搬乃至ハ發病セシムル上ニ於テ普通ノ帆船若クハ汽船ニテハ容易ナルモノニアラズ又本島ニ於ケル發病地ト認メラル、開墾地ニ於テ特ニ突發シタル觀アルニ於テ興味アル疾患タルヲ失ハズト雖ワイル氏病トシテ贊成スル能ハザル點多シ某先輩要路ノ人ニシテ當地ノ熱性黃疸ヲ以テワイル氏病ニ重キヲ措キ大平洋ニハ黃熱ナシトカ黃熱トシテ當島ニ限り如何ナル徑路ヲ經テ來リシヤニ就キ大ナル疑問ヲ有セラル、ガ如シト雖布哇又ハフキリツピンニ發病シタル歴史ヲ有スルヨリ考フルモ本島ニ黃熱ノ絶無テフコトハ斷言スル能ハザルモノナリ予淺學目下尙ホ研究中ニテ殊ニ原因調査中ニ屬シ興味アル未來ヲ有スル疾患タルヲ失ハズト雖豫メ報告シテ大方先輩ノ一考ヲ煩ハス所以ナリ。

摺筆スルニアタリ恩師桂田博士ノ御懇篤ナル檢閲御指導ヲ謝ス。

尙ホ本病調査ニ關シ軍艦最上ノ近藤軍醫ボナベ民政病院院長菱刈醫官ノ有力ナル御援助竝ニ南拓會社岩田支配人以下社員諸氏ノ便宜ヲ與ヘラレタル及我醫局ノ小川三戸兩氏ノ終始有力ナル援助ニ對シ滿腔ノ感謝ヲ表ス。(終)

(大正九年一月十二日南洋於寓舍)

本論文ニハ熱度表六葉添附アリシモ印刷ノ都合ニヨリ之ヲ省略セリ乞フ諒セラレヨ。(編者附記)